既に死せる君主に對して――日本人の示す所のあの驚くべき敬虔の念の現はれに對しては、或程度まで學ぶことがなければならぬ。何故かと云ふに、既に崩御せられたる　天皇に對する彼の深甚なる悲しみの表現、殊にそれが久しきに亙つて續いて現はれて居る所の悲しみの表現と云ふものは、決して一個人に對して――如何に　天子樣とは云ひ乍ら、單に元首たる個人に對する觀念ではなく――それは無論神から傳はつて來たと云ふ彼の國獨特の信仰に依て彩られて居るとは云へ、決して個人に對するものではなくして――無論個人に對する尊敬愛慕の情もあらうけれど――それよりも遙かに强く働いて居るのは一國の元首、統帥者としての　天皇の位に對する眞の尊敬の念である。茲に凡ての法を重んじ、秩序を重んずるの精神が胚胎して居るのであつて、此の點に於て大いに吾々は學ばなければならぬ。

と、斯う言つて居ります。

米國青年の墮落　隨分禮を知らぬ言葉遣ひもして居りますが、日本の諒闇に際して現はれた精神を見ては、之を學ばなければならぬと言つて居る。さうして同じ雜誌の別項の中に、又かういふことが書いてある。

どうも否むべからざる罪惡の波が次第に襲つて來た。殊に否定出來ない統計が明かに青年及び幼年の義務を怠り、道德的に墮落して行く著しい傾向を物語つて居る。此の爲に社會學者も或は敎育者も、其の他青年の道德的宗敎的訓練に關與する凡ての人々をして、三思措く能はざらしむるものがある。最近に充分信憑するに足る方面から發表された報告によると、合衆國に於て一年間に爲される凡ゆる罪惡、極めて輕い罪、違警罪からして殺人等の重罪犯行に至る迄、凡ての犯罪の八十パーセント以上は年齡二十二歲以下の人間に依て爲されて居る。而して家屋に侵入して來る所の盜賊の

平均年齢は、最近十年間に二十九歳から二十一歳に下つた。又一年間に其の額數億に上る所の自動車泥棒の五十六パーセント以上が、年齢十八歳以下の若者に依て爲されると云ふことである。さうして最後に最も悲しむべき、最も恥づべきことは、私生兒を生む女の四十二パーセント卽ち約半數が學校生徒であつて、其の平均年齢は十六歳である。茲に於てか、教育に依て之を改めようと云ふ心が起つて來るのであるが、紐育州が過去三年間に、初等竝に中等教育の爲に費した金は十二億圓である。然るに其の同じ三年間にそれ等の學校の生徒にして有罪の宣告を受け、情狀酌量するに及ばずとして刑務所に送られた者が、五萬人を超えて居る。斯る事情にある時、どうして教育で之が救へるか。

とかういつて痛嘆して居る。

之が亞米利加に現はれて來た最近の事相である。然るに我國の教育者は、此の亞

米利加の教育の眞似ばかりして來たのであります。して見ると、今後日本の教育界は、結局米國の此の醜態の跡を辿るより外に、道がないこととなるでありませう。之は實に堪へ難い恥辱であり、忍ぶべからざる事相であります。日本に同情なく、我缺點と見れば針小棒大誇張するのを常とする米國記者すら、我國獨特の美質に氣づいて、之を學びたいと告白するに至つた今日、弊害百出の狀態にある彼の教育などを學んで何の得る所がありませう。國民的自尊心なき者は實に憐むべき精神的不具者であります。

如何なる學術技藝を習得するも之は狆猴にして冠するが如きもので、到底獨立自恃、世界を濶歩して萬人を服せしむる風格を養ふことは出來ませぬ。西洋かぶれの新しがり青年——青年ばかりではありませぬ、世界的とかコスモポリタンとか言ふことを、大層良いことのやうに心得た中年老年すら出來て來ましたが、此等の人達は、「國民である前に人でありたい。」などと云ふたわいもないことを得意になつて申して居りますが、そんなことは出來るものではありませぬ。吾等は

「國民」であるが故に「人」たり得るのであります。今日「國民」でないものは「人」ではありませぬ。人でなければ何であるか、獸でもあるまい。さやう、獸ではないかも知れませぬが、「憐むべき奴隷」であります。何の奴隷か、現今我國に多いものは「外國文化の奴隷」然らずんば「自己一身の快樂の奴隷」であります。

奴隷の群を率ゐては戰は出來ませぬ。近年我國がワシントン（軍縮會議）に於て敗れ、カリフォルニヤ（移民問題）に於て敗れ、甚しきは南京（支那問題）に於てすら敗るゝに至つたのも、此處に一因のあることを思はねばなりませぬ。

五

正しき米國批判——村垣淡路守の卓見　此處で皆樣と一緒に自己を反省して、

將來奮ひ立つ上に鑑としたいと思ふ記錄があります。それは村垣淡路守範正の書いた『遣米使日記』*といふものであります。

*日本史籍協會叢書「遣外使節日記纂輯」第一所收

村垣淡路守、小栗豐前守の一行は鎖國の日本から外國に行つた最初の使節でありまして、安政七年正月二十七日に横濱を出まして、同じ年が萬延と變りましたから、萬延の元年九月二十八日に品川に歸つて居ります。これは井伊直弼が、下田で結んだ假條約の本條約を取交しの爲めに、ワシントンまで派遣されたのでありまして、一行八十一人の大勢であります。此の日記を讀みますと、此の人々の實に健氣な精神に感激せざるを得ぬのであります。

安政七年、今から凡そ七十餘年前、此の人々がアメリカに行く時分、今日の所謂物質文明の機械的設備などと云ふもののまるでない我國から、當時之が非常に發達しつゝあつた亞米利加へ行くのですから、先方では野蠻人か何かの樣に心得て丁度今日吾々が、南洋から土人を引つぱつて來て日本を見せて驚かしてやる、

と云ふ樣な心算でやつて居たのでありませう。ところが、ドッコイさうはいか。ぬ船が第一にハワイに着いた。……米國軍艦ボーハタンといふのに便乘して行つたのでありますが、それからサンフランシスコに着き、南に下つてパナマに行き、汽車でパナマの地峽を越えて、向ふから迎へに來て居つたローノックと云ふ軍艦に乘つて北上し、チェサピークを遡つて到頭ワシントンに着いて居る。それからフィラデルフィヤを經て、ニューヨークまで汽車で行きまして、ニューヨークからナイヤガラと云ふ當時亞米利加第一の軍艦に乘つて、ケープタウンに寄つて日本に歸つて來ました。正に世界を一周して居る。

其の世界一周の第一に、ハワイに着いて居る。初めはハワイに寄る豫定ではなかつたのでありますが、劇しい暴風の爲めに——炭水補給の爲めに寄港したのであります。連日の難航の爲めに、綿の如く體が疲れて居るので亞米利加人は皆上陸した。そして日本の使節にも皆上陸しようと云つたが、一行はしないと云ふ。何故かと云ふと「條約を結ばない國の國土を踏むことは道でないから上陸しない。」

と云ふ。實に條理ある言分である。早くも彼が一本參つたといふ形である。

いや併し、ハワイは合衆國との間にチャント條約が出來て居て、亞米利加から公使も來て居るくらゐ親密な間柄であるから、是非共上陸しようと云ふ。さらばと云つて上陸した。ところが軈て王が、非常に歡待の意味で親しく面會しようと云ふと「條約を結ばない國の王と、他國への使節の身を以て會ふことは出來ぬ。」と云つて、それも拒絶して居る。之も至極尤な話。併し王の希望を無下に斷るのは感情上如何であらうかと云ふことになつて、最後に面會を承諾し、國王、國妃に謁して居ります。後に米國公使が或ホテルに夜會を開きまして、國王、國妃も出ると言はれるから、と云つて招待したが之も斷つた。何故斷つたかといふと「夜陰は出行せざる國風なれば忝なきことなれど」と云つて辭退して居る。

ところが其の內に王の主催の舞踏會があることになつた。王も王妃も見える。王の催しで、王の別莊で以て開かれたのだから、さあ行きませう……外國人は舞踏會といふと氣違の樣に熱心でありますから日本人も行けと云ふ。此方は夜だか

ら行かぬと云ふ、まあ夜だつて早く行つて早く歸つたら宜いだらう。何かといつて自分達も行きたいものですから盛んに勸める。さうすると最後に何と言ふかと云ふと、「吾々は貴方の國と重大なる條約の取交しと云ふ任務を擔つて居るのである。此の重大なる合衆國に對する使命を果さないうちに、遊興の爲に出歩くことはできませぬ。」と云つて、ピシャッと斷つた。流石の米國人も之には一言もなく、成程と云つて服して居る。「渠も尤なりと領掌したり。」と日記中に書いてあります。

戰はずして勝つ　一言一行悉く斯ういふ有樣で、萬事に於て向ふを壓して居る。それだからして終りには何事も皆此方の言ふことを重んじて居る狀が覗はれます。最後にワシントンに到着して愈々明日は條約の取交しの儀式といふ日になつて、それをどう云ふ樣にやるかと訊ねて見ても一向判然しない。儀禮を重んぜぬ國柄ですから無理もない。併し此方では重大な任務であります。それで取敢へず接待員と打合をして「日本では斯ういふ重大な儀式は習禮と云つて、前日に

其の日其の場に臨んですると同じことをする。さうして萬々過ちなきを期するのである。事を重んずる精神からすれば斯く爲るのが至當ではないか。」と言つて聽かせると、先方の委員が「成程尤もである。それでは今からホワイトハウスの都合を訊いて來よう。」といふので問合せて見た處が、今日は日中は差支があつて都合がつかぬ。夜では如何かといふ。「夜は外出しない國風であるからそんな事情なら此方からお斷りする。最早習禮には及ばぬ。」ときめつけて居る。

此方の言ふなり放題に向ふが動いて居る模樣が見える。こちらの言ふ事には皆道理があるのですから、一々向ふが服してしまふ。初め野蠻人の心算でひつぱつて來たが、心ある者は向ふで參つてしまつて居る。戰はずして勝つて居る模樣が、實に明々白々としてをるではありませぬか。

或とき、或所で、西洋人に招かれて御馳走になつた。そして御馳走をした人の娘さんが出て來て音樂を奏して聽かせる。「ピヤナといふ琴にひとしき糸數條を推して音を發するものをしらべけるが——ピヤノのことです——ヲルゴルに似た

る調子也――オルガンのことをヲルゴルと云つて居る――やがて唱(ひ)出(づ)るに其聲夜更(け)て犬のほゆるが如し。」之は實に名評であります。其の可笑しさを紛らはして居つたと云つて居る。又「西洋人の音聲更にたゝず、いとくるしきさまに聞ゆ。」之も名評であります。今でも實際苦しい樣です。然るに困つた事には、此の犬の遠吠えする樣な苦しげな聲を一生懸命に眞似してこれが聲樂でござる、と大きな顏をしてやつて居る者が、現在我國には澤山ある。而してこれが判らなければ肩身が狹い樣に思つて居る者があるに至つては、愈々以て愚な話であります。七十餘年前に村垣淡路守が「犬の遠吠え」といと明快なる批評斷定を下して了つて居ります。

立食の饗應――「**蔦人足の酒宴**」　此の使節がワシントンに乘込んだ時は非常な見物人があつた。すると向ふは、如何なる國の使節が來ても、こんな盛んな歡迎のあつたことはなかつたと云つて、お世辭の心算で言つて居る。併し此方はチャンと知つて居る。「之は日本を褒めた積りで言つたかも知らぬが、他の國は西洋

と風俗も同じであるけれども、吾々は甚しく之と違つて居る。其の違つて居る者が八十人も乘り込んだのだから珍しがつて居る迄である。」と氣づいて居る。彼等がどんなに云つたとて、決して煽てなどには乘つて居らぬ。其の觀察の深刻なこと批評の辛辣なことは實に驚くばかりである。

面白いのは、或所で御馳走になつて――サンフランシスコ市長竝に海軍關係の午餐會に招待されて、立食の饗應か何かに與つた。そして歸つて來て感想を抒べて居る。何と云ふかと思ふと「人々打寄(り)てけふの事ども語(り)合(ひ)てうち笑ふ。凡(そ)懇親を表したる禮と見れば眞實も見へけれど、又そしりて見れば、江戸の市店などに蔦人足などいへるものゝ酒もりせるはかくもあるべしとおもはる。」斯く申して居ります。肉を摘まみ酒を呑み、立ち歩いて喋々する狀は、成程蔦人足と言はれても致方ないでありませう。「異境の事なれば左も有(る)べけれど、かくまで事かわりたるもてなしは夢路をたどる心地なり。」と。實に面白い。

大統領は總督――「**四年目毎に入札にて定む**」　ところが愈々大統領に對面した

時の様は殊に愉快であります。愈〻國書捧呈の當日が來ました。萬延元年閏三月二十八日、之が鎖國以來、日本の使節が初めて國書を外國の元首に捧呈した時であります。

をのれは狩衣を着せしまゝ海外には見も慣(れ)ぬ服なれば彼はいとあやしみて見るさまなれど、かゝる胡國に行(き)て皇國の光をかゞやかせし心地し、おろかなる身の程も忘れて誇り貌に行(く)もおかし。

自分は詰らぬものだけれども、自分の肩には、皇御國(すめらみくに)が載つて居るのだ、其の國威を輝かして居るのである、愚かなる身の程も忘れて、誇顔に行くもをかしい、と斯う言つて居る。實に尊いではありませぬか。

その後に又かういつて居ります。——「大統領は七十有餘の老翁——ブカナンと云ふ大統領であります——白髮穩和にして威權もあり。されど商人も同じく黑羅紗の筒袖股引、何の飾もなく大刀もなし。高官の人々とても文官は皆おなじ。

……かゝる席に婦人あまた裝ひて出(づ)るも奇なり。能く考ふるに、歐羅巴の事はしらねど、サントウヰス島（ハワイのこと）は國號なる故西洋の王國の風に習(ひ)しや、大に體裁有(り)て婦人は別に面會せしなり。——サンフランシスコに來る前に、ハワイの國王國妃に會つた時の事と比較して居るのです。其の時の模樣等も實に面白い。王に一度會つて一旦退席し、改めて王妃に會つた。之が大によろしいと言ふのであります。其の時の王の有樣を書くのに、やはり筒袖股引と書いて居ります——黑羅紗の筒袖にて……金のたすきめきたるものを肩にかけ——參謀將校の懸ける肩章でありませう——金の襷めきたるものを肩にかけ云々」と書いてある、——「しばしありて又最前の席に出(づ)る手續前の如し。王の立(ち)し所に妃立(ち)たり。名はエレマ、年頃二十四五。容顏色は黑しといへど品格おのづからあり。兩肩をあらはし薄ものを纏ひ、乳のほとりをかくし、腰の方より末は、美敷(しき)錦の袴よふのものをまとひ、首には連(ね)たる玉の飾ありて生けるあみだ佛かとうたがふばかり、」……斯ういふことを言つて居る。そして其の後

に、歸つて來て話をして笑つて居ることであります――「王は金のたすき樣のものをかけて飾有(り)、妃は前に言(へ)る如くあみだ佛のごとし。さればまたざれ歌を　御亭主はたすき掛なりおくさんは大はだぬぎて珍客に逢ふ……」かういふ調子である。

ハワイの方が我國より先に米國と交通して、所謂文明の利器も取入れて居たのであるが、そんなものはまるで眼中にない。

かうして亞米利加に行つて、そして大統領に會つて後曰く……「サントウヰス島は……西洋の王國の風に習(ひ)しや大に體裁有(り)て婦人は別に面會せしなり。合衆國は宇内一二の大國なれども大統領は惣督にて四年目毎に國中の入札にて定(め)けるよしなれば……」實に名言だと思ひます。選擧だなどと偉さうなことを言つて居りますが、正に入札に相違ない。そんなことで一國の元首が定まるといふ國柄が何處に良いことがありませう。

然るに現今は、此の亞米利加の教育の影響を受けて、國民的自尊心を失つて居

る者が多い爲に、選擧などといふことを、大そう良い事のやうに考へて居る。吾吾は是非とも村垣範正の示した此の精神に目覺めなくてはならぬ。目覺めて見れば實際入札である。

入札にて定(め)けるよしなれば國君にあらざれど御國書も遣されければ國王の禮を用(ゐ)けるが、上下の別もなく禮義は絶(え)てなき事なれば、狩衣着せしも無益の事と思はれける。されど此度の御使は渠も殊更に悦び、海外へほこりて、けふの狩衣のさまなど新聞紙にうつして出せしよしなり。初(め)て異域の御使、事ゆへなく仰(せ)ごとを傳へけるは、實に男子に生(れ)得しかひ有(り)てうれしさかぎりなし。

ゑみしらもあふぎてぞ見よ東なる我(が)日(の)本の國の光を
おろかなる身をも忘(れ)てけふぞかくほこりがほなる日本の臣

斯ういつて重大なる任務を果して滿腔の喜を洩して居る。それが濟んでから、初めて舞踏會にも招かれて居ります。

男女組合(ひ)て、足をそばだて、調子につれてめぐること、こま鼠の廻るが如く――實にうまい――何の風情手品もなく幾組もまはり、女のすそには風をふくみいよ〳〵ひろがりてめぐるさまいとおかし。是をダンスとて踊の事なるよし。高官の人も、老婦も、若きも、皆此(の)事を好(み)てするよし、數百人の男女、彼の食盤に行(き)て酒肉を用ひてはこの席に來り、かわり〴〵踊る事とて終夜かく興ずるよしなれど、をのれは實に夢か現か分(か)ぬばかりあきれたるまでなり。ジュホントをそゝのかして、主に暇を告(げ)て客舍に歸る。凡(そ)禮なき國とはいへど外國の使節を宰相の招待せしには、不禮ととがむれば限(り)なし。禮もなく義もなく唯親の一字を表すると見て免るし置(き)ぬ。

と。向ふでは此方を子供扱ひ、野蠻人扱ひにして得意になつて居つたのであります。せうが、事實は此方が先方を子供扱ひにしたのであります。

或所で砲臺を見物した時に、斯ういつて居る。

合衆國第一の炮臺とて周圍一里直徑六町あるよし……數多の大炮能(く)みがきて有(り)――向ふは大いに恐がらしてやらうと思つて見せて居るのだが些とも恐れて居ない――按(ず)るにをのれは炮臺の事は深くしらねば得失の論は言(は)ず、されど目當もなき海面へ向ひ、川口は遙(か)はなれたれば、實用にはいかゞあらん。所々の炮臺を見しが、多くは飾物にして實用薄し、實備は軍艦の方遙(か)に勝りし成(る)べし――それはナイヤガラ、現在亞米利加のニューメキシコとかペンシルバニヤとかに當る其の當時亞米利加第一番の艦を見て居るのですから、それを云ふのです――實備は軍艦の方遙(か)に勝りし成(る)べし、惣じて彼の軍法は虚にして實なし。ローノッ

ク（船名）ポーハタン（同上）ナイヤガラ（同上）皆彼の誇りし大艦なれど精兵は僅（か）十二三人――三百人から乘つて居るのに、其の中で本當に恐るべきものは十二三人と觀破つて居る――其（の）餘はみなソルダート、マダロス皆日雇稼（ぎ）も同じ、都（べ）て何事も進退速（か）なる故に我國人恐れけれど手銃大炮の業に熟せしは稀なり、……我國の義をもて一度彼をみぢんにするは安き事也とひそかに思（ひ）けり……

偉い觀察ではありませぬか。盲目（めくら）、蛇に怖ぢずではありませぬ。殆んど一年の間亞米利加の三つの大きな軍艦を乘り廻して、チット見て來て之を言つて居る。我國の義を以てすれば微塵に碎けると云ふ、決して向ふ見ずの强がりではありませぬ。ワシントンに滯在中海軍造船所（ネーヒーヤード）も見て居りますが、向ふでは、此所で文明の威力を示さうといふ考から周到な準備をして、鑄型に湯を注ぐ所、大砲の穴をくる模樣から、大砲の彈を削る操作に至るまで見せて居る。さうすると何と云ふ

かと思ふと、斯ういつて居る。

大炮の巣中へ錐を入（れ）外を削（り）、または大炮の彈丸見るがうちに百の數も出來たり……銅板を延（ぶ）るなど殊に奇なり、此（の）機關は、我國にも用ひなば國益は言（ふ）ばかりなしと思はれける。

便利な機械ぢや買つて行つたら役に立つだらう――機械が偉いのだ、何にもそんなに驚くことはない、買つて歸つたら爲になるだらう、それだけであります。少しも驚いて居らぬ。

今日我等に要あるは唯この識見と確信のみ！ 村垣淡路の一行の人々は西洋の文明を斯く批評したが、此の時以來六七十年經つた今日、之より以上に適切なる西洋文明の批評が出來て居るかどうか疑はしい。

明治七八年の頃西郷南洲翁が私學校の生徒に訓へて、

文明とは道の普く行はるゝを言へるものにして、宮室の壯嚴、衣服の美麗、外觀の浮華を言ふに非ず。世人の西洋を評する所を聞くに何をか文明といひ何をか野蠻といふや少しも了解するを得ず。眞に文明ならば未開の國に對しては慈愛を本とし懇々説諭して開明に導くべきに、然らずして殘忍酷薄を事とし己を利するは之れ野蠻なりといふべし。

と言つて居られます。眞に千古の名言であります。人の道のかく庶民に至るまで普く行はるゝ國が文明國であります。汽車、汽船、器具、機械の道具立が如何に多くても、仁なく義なきものは文明國とは言はれない。此の道理が判然と悟れた時、吾々は戰はずして最早勝つて居る。維新當時の我先輩に上述の如き卓拔なる識見と、大盤石の如き確信があつたればこそ、僅々五十年にして全世界に英、米二國の外、我に對抗し得る國の無いまでに國威を伸張することができたのである。

今日此の隆々たる國威により、開國以來半世紀間に攝取を了した自然科學、並にその應用技術を驅使し、二千五百年の傳統ある日本國民精神を奉じて立つ時、世界孰れの國か敢て我に戰を挑むでありませう。

禮もなく義もなく唯親の一字を表すると見て免るし置(き)ぬ……
我國の義をもて一度彼をみぢんにするは安き事也とひそかに思(ひ)けり
……

此の自覺、今から七十年の昔に、我同胞の先輩が持つただけのこの見識と確信とを今日吾々が保持して居るならば、もうそれで充分である。日米は戰ふの必要なし。戰はずして彼を屈服せしめる道は此處に立派について居る。而して此の識見と確信とは、古典の體得と新英學の學習とに依て與へらるゝものと信ずるのであります。茲に至つて初めて吾々は

明治天皇の畏き御製

よもの海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさわぐらむ

を拜誦し、天地と共に廣く大なる　大御心の忝なさを戴き奉ることが出來ようかと存ずるのであります。

解題

理學博士河村幹雄先生は今から十年前、昭和六年十二月二十七日に亡くなられた。多難なる日本の前途に一縷の曙光を望み見られながら、「天子樣の御役に立つ人間になつてくれよ」といふ言葉を殘して、憂國捨身の一生を終へられたのであつた。

先生が比類なき達識と的確なる豫想とを以て我が國の教育に關し警世憂國の衷情を披瀝せられたことは周く人の知るところである。九州帝國大學工學部の地質學の教授であられた先生が、あのやうに教育の重大性を指摘し、教育界の現狀に痛心の叫びを擧げられたのは、もとより已むに已まれぬところがあられたからであつた。

こゝに飜刻した二篇はその叫びの一端であつて、『國防の將來』は大正十二年十一月二十三日福岡縣教育會總會に於て、『日米不戰論』は昭和二年五月二十八日吳鎭守府に於て、それぞれ講演されたものである。

『國防の將來』と『日米不戰論』『國防の將來』については、最近關口泰氏が『興亞教育論』に於て、又東北帝大教授廣濱嘉雄氏が『公民科の本義』に於て、何れもその卓見を推奬してをられるが、この一篇の骨子は「國民精神の力に據つて國民精神を護る之れ國防であり」「國民精神の力に據つて國民精神を未來に傳ふる之れ教育である」、その故に國防と教育とは一體不二である、といふにある。先生はまづ國防を「自然」と「人」との二大要素に一往分析しながら、しかも後者は前者に對し統御的地位を占むるものであるとなし、深き信念を展開するに科學的精確さを以てしつゝ、次の如く斷言してをられる、「國防の如何は畢竟人の如何に歸します。國防に最も重んずべきは實に人的要素であります。人的要素は自然的要素の缺陷を補つて餘あるものであります」と。滔々たる物的手段偏重の時潮に慊らざりし人々にとつて、これは正しく空谷の跫音ともいふべきものであつた。先生が第一次世界大戰に於ける英獨の勝敗をその國民精神の强弱優劣に求めてをられる論理は、今次大戰に於てそのまゝ逆にドイツの對英制壓に適用し得るであらう。そしてまた、人的要素の統御的優越性については、昨年十二月八日の大東亞戰爭緒戰に於ける赫々たる大戰果が最も雄辯に先生の立論を證明したのである。

それ故に『國防の將來』一篇は、いはば今日の高度國防國家體制を豫言したものといつて

よい。しかも今日の國防國家體制强化論者の中にも往々物的手段偏倚の傾向があり（人的資源などといふ言葉にもその傾向が看取出來る）、大東亞戰爭勃發前に於ては寧ろその傾向の方が有力なるかに見られたことは深く反省せらるべきである。

また、教育・國防不二なるが故に「國防の將來」は卽ち「教育の現狀」如何にあるとして、教育界の宿弊を痛論し、教育に對する一般國民の無關心を深憂し、「我國防の將來は空前の危機にある」といひ、「相共に必死の覺悟を定めて教育革新の事業に從事」せむと結論してをられる點は、遺憾乍ら今日に於ても猶ほ倍舊の切實さを以て首肯せねばならぬものがあるのである。

『國防の將來』がワシントン條約締結後間もなく講演せられてゐるのに對して、『日米不戰論』は日米不戰條約締結の前年に講演せられ、ロンドン條約調印の直前に海軍研究社から公刊せられてゐる。それは『國防の將來』に於て示された原理の現實卽應的展開といふべく、先生自らいはれてをる如く、「日米が戰はないと云ふことではなくして現に戰つて居る——所謂干戈により戰場に相見ゆるに非ずして、兩國の意志の鬪に於て、盛に勝負を爭つて居る、——我意志をして彼に勝たしめようと冀ふから」武力に俟たずして彼に戰ひ勝つの論を考へて見よう、といふにあつた。ワシントン條約——不戰條約——ロンドン條約がこの意味に於

ける米英の對日攻勢であつたやうに、先生の『不戰論』も亦思想戰による對米必勝の根本戰略に外ならなかつた。

先生は『日米不戰論』公刊の序に於て「英國が新嘉坡に軍港を築き米國が眞珠灣に武裝を固めることは確に我國の脅威であるが、平和人道を名として開かるゝ倫敦會議で英米が肚を合せて我を陷れる策略の方が猶ほ一層恐ろしい。」「又我國からわが有力の武器たる巡洋艦と潜水艦とを奪ひ去らうといふ企の誰の眼にも明かな倫敦會議に比ぶれば、民衆の幸福を名として宣傳せらるゝ獨露系共產主義の潜伏浸潤の方が國に對する危害は更に大である。」併しそれにも增して「玆に最も恐るべく警戒すべき國家生命の敵でありながら全く注意せられずに觀過せられてをるものがある——アメリカニズムの侵略がそれである」と、次第に問題の焦點を教育的思想的觀點に凝縮しつゝ、「襲ひ來る現代アメリカ式思想・道德・風俗・習慣・生活樣式の我に加ふる危害は、實に戰慄すべきものあるに拘らず國民一般は元より、之が指導者を以て任ずる人々すら、不用意に之を觀過し、その暴威を揮ふがまゝに放置して居る有樣である」と痛歎し、「誰が日米戰はずと云ふか、もう既に戰つてゐる。吾等は、倫敦海軍會議に於てはどうしても敗けてはならぬ。」「一度吾等が盲ひたる眼を日本精神に見開き、低級愚劣のアメリカニズムを振棄て、祖先傳來の遺風を奉じて質實なる生活を營み始むるならば、

米國は勿論、英吉利も獨逸も佛蘭西も露西亞も、全世界の國といふ國で我に敵するものは一も無い、——二千五百年來養ひ來つた日本精神こそ、眞に世界の至寶である」と斷言してをられる。

かくてこの二篇を通じて先生は低級アメリカニズムを完膚なきまでに擊摧せられ、また過去に於てこのアメリカニズムに對して日本精神の輝かしき凱歌をあげた一例として、幕末遣米使節村垣淡路守の日記を詳細に引用紹介してをられる。

先生の歿後滿洲事變を轉機とする言論界の一大轉換、就中大東亞戰爭勃發後の急展開は、先生の痛切なる一言一句に悲憤の涙を絞らしめた當時の政治・外交・思想界の事實をも、遠き昔の夢物語であるかの如く感ぜしめるやうになつた。けれども我々はこれらの講演の語られた前後——ワシントン會議より滿洲事變に至る頃まで——の時代的背景、就中日米關係を主とする國際情勢を回顧し、大東亞戰爭勃發の意義を明らかにし、又當時の我が國民生活の弛廢に對して十分反省することを忘れてはならぬ。それは今日及び將來の國運打開に缺くべからざる原理の究明である。以下少しく想ひをこゝに致し、以て本講演の思想史的意義を明らかにしたいと思ふ。

米國の極東政策　日米間の確執はその由來の深く且久しいものがある。にも拘らず米國の傳統的極東政策についての一般の認識は今日猶ほ十分ではない。故に玆に少しく彼の國の外交政策一般と關聯せしめつゝ特にその極東外交の眞義を、アメリカ外交史家達の論說に從つて解明しておかう。

元來合衆國建國以來の外交政策の傳統は大統領モンローの名を負ふ孤立・不干涉の主義として知られてゐる。それは既に合衆國の獨立以前に於てその開拓者達によつて抱懷せられた原理であつた。まだ弱い合衆國が歐洲との協同によつてその混亂に「まき込まれる」に至ることを恐れ（ワシントン）、「歐洲諸國の道具」たらしめられることを怖れたのである（ジョン・アダムス）。從つて孤立といひ不干涉と稱する政策も絕對のものではなくして「實はワシントンを動かしてその國民をして歐洲の政治的事件への參加に反對する樣に敎へたものは自己の利益といふ動機であつた。……我々の弱さの故に自らを解放することを得ず且つ我々の行動の自由を失ふ危險があつたからである。」（ガーナー『米國外交政策』）合衆國自身の利益はその後傳統政策の名の下に孤立・不干涉・不植民の原則を命じ、やがては又モンロー主義をして國際法の原則であるとまで主張せしめた（但し唯アメリカの爲めにのみ適用される原則として）。又、之に關聯する中立國の利益、海洋の自由等或は國際法の原則と稱し、或は

人道主義の原則といはれる一聯の原則も亦實は合衆國自身の利益といふ立場によつて取上げられ主張され來つたものである（ポッター『米國外交政策の本性』）。

孤立と不干涉と不植民の政策を生み出したこの同じ合衆國の利益の考量はアジアに對しては逆にアメリカをして干涉と植民と門戶開放の政策とをとらしめるに至つてゐるのである。アメリカ人は矛盾の國民であるとミュンスターベルヒは言つたが、併しその外交政策の矛盾は實は合衆國の利益といふ基本原理によつて矛盾なく統一されてをり、これがその相對的實力に關する實知と相俟つて雜多の互に矛盾する政策を夫々の美名の下に命じつゝあるのである。かの提督マハンもいつてゐる、「歐洲に不干涉主義をとることは實は極東に於て協力する爲めである」と。

しかも米國の極東外交は夙にその海軍によつて導かれ、「海軍の指導者達は早くから、太平洋が將來國際市場角逐の場所となるべきこと、東洋には大なる經濟活動の將來性があること、極東に於ける根據地及び領土の獲得が經濟的發展にとつて必須なること、而して武力的示威によつてのみ、殊に强國に對するそれによつてのみ、米國の通商利益は助長確保し得べきことなどを認めてゐた。」（ビアード『國家的利益の觀念』）所謂黑船を以て我が國を威壓せんとした彼のペリー提督は、「やがて米國は米大陸西部を越えて國權を擴張すべき必要に迫

られるであらう。予は責任を以てこの地域に足場を設け、次いで東洋に於ける米國の利益を永久化するの必要なることを慫慂するものである」と言つた。かくして中部太平洋には一八五〇年代にジャーヴィス、ホーランド、ベーカーの諸群島を、北太平洋には一八六七年にミッドウェイを、一八九八年にはハワイを、また米西戰爭の結果一擧にウェーク、グァム、フィリッピンを併合し、南太平洋には既に一八七二年サモアに於て獨占的海軍根據地を獲得し、かくして十九世紀末年までの間に合衆國よりアジアの北と南の全線に到るべき強固なる「足場」は形成され終つた。それと共に又北米の西海岸と北大西洋より遙か太平洋の彼方に至る「大道」としてのパナマ運河に對し新たなる關心は生れたのである。

而して十九世紀中にその新大陸國土の開發に向けられてゐた努力は米西戰爭と共に一段落を告げ、輝かしい戰勝と共に極東への「足場」は完成し、自己の實力に對する自信が漸く增大するに至つた時、玆にジョン・ヘイによる「門戸開放」の宣言は生れたのである。それは合衆國が從來太平洋の彼岸より空しく望みつゝ參加し得なかつたアジアに於ける列强の植民的膨張に割込むべく、列强の勢力範圍に制約を加へ、支那の分割を防ぎ、以て米國通商の自由なる發展に開放せしめんとするの方策であつた。自らはパナマ運河地區の租借を行ひつゝ、將又、カリブ海の征服と閉鎖とを强行しつゝ列强の極東に於ける租借を國際法原則に反する

事として排斥せんとし、しかもその間に何等の矛盾をも感ぜしめざる所以のものは實に「合衆國の利益」に外ならなかつた。

日露戰爭はロシアの滿洲よりの追放であり、從つて英國及び米國にとつては舊ロシア勢力範圍における自由且つ無制約の通商的發展の場所を提供するものとして期待されたのであつた。我が國人から「恩人」として感謝されてゐる大統領セオドーア・ローズヴェルトは、實はロッヂとの共同立案に成る一八九八年の「大政策」(Large Policy)に明らかなる如く、比島領有——極東干涉の熱心なる主導者の一人であつた。されば日露戰爭の結果滿洲に於ける日本の地位の確立が明らかとなるや、明治四十年(一九〇七)七月六日、彼はフィリッピン米國司令官ウッドに對し對日戰備の充實を命じ、同十二月には戰艦十六隻、補助艦三十一隻より成る米國大西洋艦隊を太平洋に廻航、マゼラン海峽を迂回する遙々一萬三千海里を乘切つてわが東京灣頭に至り大示威を試みたのであつた。しかもこの時我が朝野は歡待至らざるなく、時の政府は自發的移民制限を宣言する覺書卽ち「紳士協約」を彼の手に與へ、更にこの艦隊を送るに日米仲裁裁判條約の贈物を以てしたのである。又他方西部アメリカの交通王ハリマン及びアメリカ銀行團は南滿洲鐵道が日本に移讓されることを知るや、滿洲に大鐵道建設計畫を立て、先づ東支鐵道及び南滿洲鐵道を買收せんとしてハリマンは日本に來朝した

のであつたが、これは危くも小村外相の努力によつて阻止されたのであつた。この企てこそはロッヂが曾て一九〇三年ローズヴェルトに進言した「彼處（滿洲）に於ける我が通商は極めて大規模にならんとしつゝあり、されば我々は極めて强力なる基礎を獲得すべきものと考へる」といつた、その强力なる基礎を置かうとしたものに外ならない。爾來ノックス、ストレート、ハリマン等によつて「日本の滿洲に於ける堡壘を擊破することに」全精力が傾けられ、執拗なる努力が拂はれて來た。その努力は遂にはノックスの在滿外國鐵道國際管理案（Neutralization Plan）となつて現はれ、之が英露の反對に遭ふや日英同盟の打破に向つて突進し、明治四十四年（一九一一）英國をして日米戰爭の場合には日本と協同せざるべき旨を約せしめるに至つた。

かくの如くアメリカはその極東進出の爲めに凡ゆる努力を傾け、一方自由と平等との美名の下に實は實力主義に外ならぬ門戸開放、機會均等の原則を喧傳しつゝ、他面大統領タフトをして、合衆國は東洋に於けるその正しき要求を裏づけるには「口頭の抗議と外交覺書」以上のあるものを以てする用意あるべき旨の主張を爲さしめ、所謂「外交」による對支積極政策は著々と進められて行つた。

この間尙ほ一言すべきは屢々繰返されたいはゆる日米危機說である。これには日本海大海

戰後に露帝の從弟に當る獨乙皇帝カイゼルが唱へた黃禍論の影響が少くない。カイゼルは日露戰爭の最中ロシアの爲めに背後より種々計るところがあつたが、他面その世界政策實現の方途としてのバグダッド鐵道の實現に着手しつゝ、歐米人の關心を極東に集中せしむる爲めに、「日本がロシアに對して勝利を得れば、フィリッピンを問題として合衆國と戰ふであらう」、「過去數箇月アジアに起つた事件の推移を靜かに觀察する者は、その中にカリフォルニアのみならず、合衆國全體に對する脅威の存することを見逃さぬであらう」といふ如き虛妄の流言を放つた。偶〻邦人の米國に密航する者相踵いで數萬に上り、この流言はいはゆるヤンキー心理に投合して、日本移民排斥運動となり、日米危機說の喧傳となつて、既に述べた紳士協約、日英同盟弱體化等の後に於ても、なほハースト系新聞は頻りに日米開戰論を書き立てた。かくてわが朝野をあげての努力も空しく、排日移民法は大正二年カリフォルニア州に於けるその制定を初めとして、合衆國全體に波及するに至つた。

之を要するに、合衆國の極東外交への積極的進出はその實力の自覺を意味した。當初は協同の政策によつて、その後進性を補はうとしたのであるが、歐洲大戰後は事情は異なつた。「曾つて孤立政策を要求したのは我々の弱さであつたが、今日は最强者の力があるのである」（ガーナー）といふやうに、單に太平洋のみならず世界の指導權を把握することが合衆國の外

交政策の基調となつて來た。

かくてセオドーア・ローズヴェルトをして、「地中海時代はアメリカ發見と共に亡びた。大西洋時代は今や發展の最頂上にある。すべてのもののうち、最も偉大なる太平洋時代は、今まさに曉を告げてゐる」と叫ばしめたといふその太平洋に、「アメリカの平和」即ちアジアの桎梏を築かしむるか否かは、漸く日本國民の雙肩にかゝる大問題となつて來たのである。

第一次世界大戰と日米關係　大正三年歐洲大戰勃發するや、我が國は日英同盟に基づき獨逸に宣戰し、青島を攻略し且獨乙領太平洋諸島を占領した。翌四年、時の大隈内閣は支那の袁世凱の政府に對し、所謂二十一箇條要求、詳しくは十四箇條の要求と七箇條の希望とを最後通牒の形式を以て提出した。その目的は、嘗て三國干渉により遼東半島の還附を我が國に強要し、しかも自らは支那に對し次々と樞要の地を占取し來つた歐洲列强の勢力を完全に排除し、その軍事的財政的支那分割政策に對しては、隣國として十分の關心を有する旨を表示したものに他ならず、固より根本に於て機會均等の原則に反するものではなかつた、しかも、この大隈首相の意圖は日露戰爭の意義を再び闡明した一大壯擧であり、そこに東亞殊に支那に對する自主的態度の特筆すべきものがあつたにも拘らず、肇國の精神に徹する信念とそれ

に基づく透徹せる世界史觀とを缺除してゐた爲に、支那は固より之を煽動する英米等の囂々たる非難に對し、それを壓倒し解消せしむべき時代精神の背景と國内輿論の支持とを贏ち得なかつたのは頗る遺憾であつた。然し乍ら時宛も英米は歐洲大戰戰局の推移に對する關心に忙しく、我が政府の行動を十分に牽制することが出來なかつた。一九一八年大戰がコンピエーニュの森に於ける休戰條約を以て終了するや、かの國際平和守護神を以て自他相許せるかの觀ありし米國大統領ウィルソンは全精力を集中して對日攻勢に轉じたのである（グリスワルド『米國極東政策史』）。當時我が國の外交評論家にせよ、所謂アメリカ通にせよ、ウィルソンがそれほど猛烈な意圖をもつてゐようとは想像も及ばなかつたものの如くである。こゝに當時の我が思想界が英米の宣傳に完全に乘ぜられてゐたと考へるべき理由があり、そこに恐るべき陷穽――ワシントン會議に慘敗を喫すべき最大の契機がひそんでをつたのである。

かくて國際平和の美名の下に英米の現狀維持機構は著々完成し、勢の趨くところ之に追隨せざるはなく、流行を追うて新思想を衍ふ我が知識層も亦軍備の撤廢と集團保障とに絶大の信頼をかけて毫も怪しむ所がなかつた。豈圖らんや、侵略不承認と集團保障とは、日本攻擊のウィルソン原則ならんとは。

ワシントン會議　大正十年十一月米國大統領ハーディングの提議により開催せられたワシントン會議は、日英米佛伊五箇國間の海軍軍備制限條約、日英同盟を解消せしめた四箇國條約及び支那の領土保全・機會均等を約した九箇國條約等を成立せしめた。

第一の海軍軍備制限條約は元來時の英海軍卿リー・オブ・フェーアハムの提言に基づくものである。即ち彼は米海軍長官デンビーに對し、「米國はもし必要と思ふ時、全艦隊を太平洋に集中し、大西洋は英國の防衛に委ねることが出來るであらう」と提議し、米海軍をして日本抑壓のお先棒たらしむ可く計畫した。しかもそれは英米兩國が協同することによつて、兩洋艦隊勢力を減少せしめることなく軍備縮少を實行し得るの案であつた。いはゆる五・五・三の比率（英米各五二・五萬トン、日本三一・五萬トン）も實質的には十對三の對日比率を目的とするものであつた。のみならず現有勢力の算定に於て米國は所謂ペーパー・シップをも加へて事實上の軍備擴張を敢へてしたにも拘らず、我が國に對しては精鋭土佐を始め十數隻の艨艟を一發の砲彈をも用ゐずして擊沈せしむることに成功したのであつた。

既にして勁敵ドイツとの競爭より解放せられたイギリスにとつて、日英同盟存續の意義は消滅し、のみならずそれは徒らに英米合作の障礙と目さるゝに至つた。さすがにロイド・ジージは「どうしても敏感な日本國民を納得させるに足る尤もらしい遁辭と魅力ある慰藉とが

必要である」と思ひ、乃ち日英同盟の精神を擴大したものと稱する第二の四箇國條約が提議せられ、相互安全保障に名を藉りる對日包圍陣は形成せられたのであつた。

しかも太平洋防備制限に關する日英米三國海軍覺書は相互に太平洋上の諸防備の現狀維持を約するものであるにも拘らず、米國はその太平洋沿岸及びパナマ海岸諸島嶼は固よりハワイをも除外し、英國はカナダ沿岸・濠洲・ニュージーランドを始め南支那海の南端を扼するシンガポールをさへ除外した。しかして我が國は實に千島列島・小笠原諸島・琉球諸島・臺灣及び澎湖諸島をすらも擧げて現狀のまゝに維持することを約したのである。太平洋とは實は日本近海を意味するものに外ならず、英米はあたかも大阪城の外濠を埋める如き謀略に成功したのであつた。

第三の九箇國條約こそは傳統的米國極東政策の具體化であり、今次日米會談決裂の直接原因たる彼の原則論も、この「神聖なる」二十數年前の條約に根據を置くものである。

即ち米全權ルートは次の四原則を主張した

一、支那の主權獨立及び領土的並に行政的保全を尊重すること。

二、支那が有力にして且基礎鞏固なる政府を完成し支持する爲め支那に對し十分且無制限なる機會を與へること。

三、支那全土に亙る各國民の商工業上の機會均等主義を有効に樹立し且之を支持する爲めに努力すること。

四、友好國民の權利を損傷する虞ある特權若しくは特別の利益を現下の事態に乘じて獲得せざること、並に右友好國の安全に有害なる行動を認容せざること。

この四原則を條約の第一條として神聖化することによつて、我が國は大正六年に米國をして滿洲に於ける優越權を承認せしめたる石井・ランシング協定を廢棄し、大戰劈頭の青島攻略によつて獲得せる山東の諸權益をも無償で放棄し、延いてはかの日露戰爭によつて得たる滿洲の特殊權益すらも機會均等、門戸開放の美名の下に葬り去られようとさへした。思ふに滿洲に對する米國の野心は、ハリマン・ノックス・ストレート等の再三再四に亙る謀略にも拘らず悉く失敗に歸し、二十一箇條要求により我が國の地位は益〻安固となつたので、憤懣やる方なく復仇の機を窺つてゐた米國は、遂にこの會議に於て日本の對支進出を決定的に阻止せんとする方策を建てようとしたのである。

かくて少數識者の痛憤にも拘らず、若干の抵抗を敢へてしたのみで、我が國は完全に英米に屈服し、會議は大正十一年二月六日に終了した。昭和二年國際聯盟協會發行、信夫淳平博士著『大正外交十五年史』に曰く、「ワシントン會議こそはよしんば史上空前又は絶後と評す

べからざる迄も、その成績に徴し、稀有の大會議且好會議なりしといふを妨げない」と。これは單なる一例に過ぎぬ、當時の我が知識層の常識は概ね斯の如くであつた。試みに當時の法律辭典、百科辭典等によつて「ワシントン會議」の項を索出するならば、この屈辱的條約に對する記述に於て、實に思ひ半ばに過ぐるものがあるであらう。

排日法・不戰條約・ロンドン會議　大正十二年九月一日關東に大震災起り、日本の經濟力は半ば燒盡し五十年位は回復しないだらうと米國人は推測した。我が國民が米國人のいはゆる人道的熱誠の籠つた義捐の金品に隨喜してゐる間に、好機逸すべからずと排日法案は著々準備せられ、明けて十三年（一九二四）二月ジョンソン排日法案が兩院を通過し、日米間三十六年の懸案たりし移民問題は最後の結末を告げた。米國は我が國の自發的移民制限に甘んぜずして、我が民族的矜持をも蹂躙し去つたのである。我が國の輿論はこゝに激昂し、駐米埴原大使は「かゝる立法は親善なる兩國の國交に重大なる結果を生ずるであらう」と抗議したが、米當局が「重大なる結果とは何ぞ」と覆面の戰爭を以て威嚇せんとするか」と逆襲し來るや、政府は國民痛憤の中に埴原大使を召還して事無きにをさむるといふ軟弱振を示したのである。

當時我が言論機關の最大關心は寧ろ歐洲の賠償會議にかゝつてゐたし、國際聯盟の精神を貫徹することが急務であるといつたやうな空氣が知識層の間を支配してゐた。そして翌十四年のロカルノ會議の成立は禮讃の的であり、安全保障こそは國際問題解決の最善の方法であると信ぜられてゐた。そして、同じ年日本を目標とする以外の何物でもないシンガポール英海軍根據地の大擴張案の英議會通過に對しては、ワシントン會議で堂々の筆陣を敷いた伊藤正德氏が再び懸命の痛擊を加へた外、我が言論界は概して振はなかつた。

昭和二年ジュネーヴに於ける日英米三國海軍軍縮會議は、却て英米間の歩調一致を見ずして事實上決裂したが、第四回の一般軍縮準備委員會に參加したソヴィエットの代表リトヴィノフは軍備の全廢を提議して列國の度膽を拔き、我が國では徹底的軍縮論者尾崎咢堂は「軍備縮小の急先鋒として輿論を麾きたる識見卓越」を謳はれる有樣であつた。

昭和三年米國務卿ケロッグは不戰條約を提案し、集團保障の理想を掲げて武力行使者を不道德漢として非難し、戰爭を非合法化すべく世界的輿論の釀成に努力した。不戰條約はその間に若干の委曲はあつたが八月パリに於て十五箇國の調印を見、我が國も勿論それに加はつた。しかもこの春三月米國下院は海軍擴張案を通過せしめ、秋十一月にも米政府は海軍擴張計畫を公表して居るのである。米國の軍備擴張はつねに外交上の威嚇の具とせらるゝのであ

るが、その特色はこゝにも遺憾なく示されてゐる。兎も角、不戰條約を日米間の問題として見る時、上來述べ來つた屢次の確執乃至危機說の存在を考慮に入れねばならぬであらう。

翌四年二月米國議會は再び海軍擴張計畫を通過せしめたが、翌五年五月にはロンドン會議が開催せられ、補助艦に關する廣汎なる制限を含む海軍軍縮條約に對し、再び我が當局は英米の前に膝を屈するに至つた。「どうしても敗けてはならぬ」と河村先生の叫ばれた倫敦會議もかくして又々慘敗に終り、米國國務卿スチムソンは日本の態度に對し「脫帽」して敬禮をしようと嘯いた。しかも、當初政府と共に一應强硬の態度を示すかに見えた新聞紙の論說なども一夜にして掌をかへすが如き豹變ぶりを示した。以て當時の國民思想の一斑を推すに足りるであらう。陸海軍部內有志者の憤激は固より、國の前途を憂ふる者の聲は漸く高まり、殊に條約御批准に關する上奏手續に於て政府に統帥權の干犯ありとの非難が起つた。蓋し英米追隨外交はロンドン海軍條約を以てその極點に達したといつてよいであらう。

日露戰爭以後に於ける國內情勢　思ふに日露戰爭後の十年間は、我が國產業の勃興期に當り、ひたすら英米系產業文化の輸入に忙しく、他を顧みるの餘裕なき有樣であつた。この時期に於ける我が國の思想・政治・外交・經濟等あらゆる方面の英國化は實に著しきものがあ

り、この十年間に醸成された親英的空氣は長くその影響をとゞめ、今日に於てすら猶ほそれを脱却し得てゐないのである。

議會に於ける自由討論は、輔翼の實を擧げるはおろか所謂「言論による勢力の角逐場、言論の檢閲所」たる機能をさへも働かさずして、國内的對立抗爭——即ち政黨對政黨、政黨對官僚、政黨對軍部、官僚對軍人といふ如き分裂——を助長し、言論・集會・結社の自由はあらゆる思想運動・社會運動乃至政治運動の溫床となつた。

既に指摘せる如く、第一次大戰後に於ける英國外交の根幹は一變して對米協調による日本壓迫に豹變したが、その思想文化的謀略と煽動とは、その支配下にあつた世界通信網を動員して一段と老獪巧緻を加へ來り、尤もらしき理想の宣傳、說得技術、買收、威壓等の巧妙なる併用はめざましきものがあつた。米國の英國と異なるところは實質的伸長の機をねらひ乍ら思想文化工作に相當の力を注いでゐることであるが、しかゝ米國は往々英國の謀略に誘導せられてをり、このために上述の如く米國の極東進出も思ふが如くには進捗し得なかつたのである。然し乍ら英米間の步調が完全に一致すると否とに拘らず、第一次大戰後に於ける兩國の日本壓迫が決定的となつたことは否定すべくもない。しかも我が國民は大戰による好景氣の惰性に醉うた弛緩心理からしてこの思想的攻勢に對して全く無防備狀態であり、デモク

ラシイを主流とする功利思想、經濟萬能思想、產業自由主義思想等は滔々として我が國の知識層を魅了し去つたのである。

他方、マルクスの階級鬪爭說を武器としたレニンのロシア革命に於ける成功は、共產黨を本據とする思想的侵略の新方式を樹立せしめ、大戰後に於ける諸國民の思想的鑪隙を覗つて奇襲潛入することに成功し、この獨露系マルクス・レニン主義の影響は、昭和の初頃より頓に我が國にも蔓延するに至つた。

英米流デモクラシイの平等思想と國際主義とによつて準備せられた溫床に於て、階級鬪爭と國際的聯繫とを經緯とする細胞組織を以て侵寇するコミンテルンのバチルスは容易に成育した。大學の教壇はまづ正義人道デモクラシイを標語とする祖國呪詛思想の搖籃となり、再轉して唯物史觀・階級鬪爭・國體破壞の直接行動を示唆する矯激思想の孵化場に發展した。

かくして靑年學生は勞働爭議・小作爭議等の階級鬪爭に誤れる英雄主義を滿足せしむるか、さもなくばキネマ・ジャズ・ダンス・ショウ等々を媒介とする低級アメリカニズムに官能を痲痺せしめ、頽廢せる享樂に心身を銷磨するかの何れかであり、祖國の運命に無關心であるのみならず、自ら外國の謀略の具に供せられてをることにも全然無自覺であつた。日露戰爭に於て我が國運を賭して戰ひ取つた滿蒙の生命線を放棄せよといふ如き暴論すらが、著

名の論客により堂々と流行雜誌に掲載されて毫も怪しまれざる有樣であつた。

かくの如き歐米追隨の思潮こそが英米ソ諸國をして愈〻暴慢ならしめ、ひいては支那軍閥をして益〻增長せしめて排日・抗日を侮日にまで發展せしめ、二十數年に亙る我が國內外の辛苦艱難をも招來せしめた根因であつた。

一方に於ては日露戰爭以來新しき日本的自覺は漸く興起し、その思想的傳統は次第に相續發展せられてをつたが、變轉してやまぬ流行思潮に對して熾烈なる思想戰を展開し乍らも、長く社會の表面を支配するには至らず、底の底の力として止まつてゐた。河村先生も亦その底の力の大いなる泉の一であり、『國防の將來』と『日米不戰論』とはこの泉より迸り出でた憂國の至情そのものに外ならなかつた。

滿洲事變・支那事變・大東亞戰爭　昭和六年九月十八日、米英に抑壓せられた十年間の國民的憤激は滿洲事變となつて爆發した。全滿洲の神速なる戡定と共に翌七年早くも滿洲國は建設せられ、日滿議定書も調印せられた。それは世界史大轉換の第一步であり、新しき世界觀の礎石を築いたものであつた。けれどもその意義が猶ほ十分に徹底せず、國內情勢の進展は遲々として動〻もすれば積年の惰性に引きずられようとする傾向があつたので、そこに阻

まれた生命の奔出力は矯激化した「昭和維新」への直接行動とさへなつて現れ、昭和七年五・一五事件が起つた。しかし昭和八年には國際聯盟脫退の通告をなし、昭和九年にはワシントン條約廢棄の通告を發し、昭和十年には天皇機關說排擊・國體明徵運動が一般化して、さしも猖獗を極めた流行拜外思想も次第に凋落し、兎も角も國家主義的思潮が漸く國內に擡頭するに至つた。

遠く歐洲の天地に於ても滿洲國の蹶起に呼應して、ムッソリーニはエチオピアを攻略して反英の烽火をあげ、昭和九年（一九三四）ヒンデンブルグ薨去のあとを受けて大統領を兼攝せるヒトラー首相は國際聯盟を脫退してヴェルサイユ體制を逐次擊破していつた。こゝに五十三對一の全世界的反對を押切つた我が國の聯盟脫退が與へた影響の少からざる世界史的意義が認められるゝにも拘らず、國內的にはこの意義は依然として積極的よりも消極的に解釋せられ、脫退の御詔書はその方向の理論に引用せらるゝことが多かつた。かくて昭和十一年ロンドン條約廢棄の通告を發する頃、再び二・二六事件起り、その冬日獨防共協定成立し、翌十二年遂に支那事變が勃發した。

かやうな大事件の連續的繼起により我が國民の認識はやうやくめざめ、世界史の動向に對する主體的把握はやうやくに深まつたけれども、それが雄渾なる經世的認識に統合され、遠

大なる世界政策に具體化するには尙ほ大きな徑庭が存してゐた。昭和維新が叫ばれてから幾多の時日が經過しながら、改革は單なる組織の玩弄に終始して、國民精神總動員運動から大政翼賛會運動となつても本質的な內的な維新は實現せられない。所謂近衞聲明の對支三原則にしても消極的なもので、窮極の目標を指示せぬ不擴大主義から何程の進歩も見られない。日滿華三國のブロックから東亞新秩序の建設へと發展し、三國同盟條約前文の世界觀に到達するまでには、非常な認識の鬪爭過程を經驗しなければならなかつた。

勿論それは單なる消極主義、卑屈思想とのみはいへないであらう。實證的科學的認識の傾向の强い日本の思想界には、世に親英米といはるゝ傾向は相當に根强くはびこつてゐた。それは「親」といつても本當に近親的に思ふといふより、只英米流の行き方が實證的で根據のある如き感情を基として、獨伊の行き方は只華々しい奇略と宣傳とによる危險な藝當をやつてゐるのではないかといふ豫防的心理が動いてゐるのである。この豫防心理は日本外交形成原理の自己防衞第一義の基礎をなしてをり、永く積極的發展力を抑壓して來たのである。

河村先生の夙に指摘せられた如く劍を持つ敵は當り易く、思想・文化の武器を持つて來る敵は却て困難である。空前の大規模作戰により輝かしい戰果をあげながら、支那事變四年間を通じて國民の上に蔽ひかゝれる陰鬱な空氣は何であるか。蔣介石を相手とせずと聲明し乍

ら、相手にすべき眞の敵に直面することなく、努めて之を回避することにより、寧ろその敵の謀略網に包圍されつゝ、徒らにその埒內にあつて彼我の力を比較計量しつゝ、萎縮逡巡してをつたからである。

支那に於ける抗日侮日は實に排英運動の巧妙なる轉換に始るものであり、國際聯盟の脫退以後英國の日本壓迫は單に支那問題のみを挾んでも容易ならぬものがあつたが、それは概して陰性であり、一般國民には睹易からざるものがあつた。これに反して米國の對日壓迫はかなり露骨であつた。

精密な統計的數字を示すまでもなく日米間の通商は米國が日本に依存する比率は逐年減少するに反し、その逆は增大し、殊に銅・鐵・機械・油等の軍備の必需品に於てそれが顯著であつた。米國は日本の軍需品供給國であり、日本の戰力を自由に操縱し得る立場にあつた。吾々が對米戰爭を恐れざるの信念を固めつゝある時に、米國は日本戰力の鍵は自らの手にあると思つてゐたのである。されば支那事變を通じて日米が相爭ふ時に米國は對日經濟壓迫の奧の手を出して來た——昭和十三年航空機及び同製品の道德的禁輸を始め、翌十四年七月二十六日の通商條約破棄の通告、十五年六月一日の大型工作機械の對日積出し抑留、更に屑鋼その他重要物資 輸出禁止、資金凍結等々。

抑：英米の對日攻勢は有色人種の頭領としての日本人を精神的にも政治經濟的にも抑壓するにあつた。從來の世界秩序に於ては自由主義貿易を原理とし、原料國は工業國に依存し、從屬した。英國にその政治經濟理論を學び、その產業文化を輸入するに汲々たりし日本は暫く有色人種の頭領たる使命を遺忘して自ら輕工業國としてアジア諸民族に對し同一資本主義の類型に屬する經濟的從屬關係を作りつゝあつた。かくて世界は三段に分れたが、中層工業國日本は更に上昇して上層重工業國たる英米の壘を摩せんとしてこゝに激しき鬪爭が展開されるに至つた。しかも叙上の經濟關係は日本をして對英依存より漸次對米依存に移行せしめ、一九三一年のオッタワ英帝國經濟會議以後に於ける英帝國ブッロクの締出しに逢會して以來その傾向が强くなり、日本は米國の太平洋經濟圏の中に定位されようとしてゐた。しかもそれが武力による一種の脅迫として我に蔽ひかゝらんとする時鬱勃として底流に沈潛してゐた日本人の世界認識は猛然として眼覺め、斷乎として日本は立上るに至つた。大東亞戰爭はかくして起つたのである。

今日及び將來に對する本書の意義　今や米國はその太平洋艦隊の殆ど全部を喪失し、フィリッピン・グァムは固よりハワイの根據地をも失つて、太平洋の制海制空權は我が掌中に歸

し、米大陸の西岸は直接わが無敵艦隊の攻擊の危機に暴されてゐる。又香港・シンガポールの擊摧に息つぐ間もなく全東印度諸島を席捲し了つた皇軍は、今や濠洲と印度とに於ける英國の勢力を驅逐せんとしつゝあり、これらの原料資源國に君臨しつゝあつた工業國イギリスは、その三大富源の中カナダを除く他の二つを失ふこととなつて、かつての依存關係は全く逆轉し、英帝國は正に崩壞の危險に瀕してゐる。

併し乍らいま、われらは無形のアメリカニズムをもかのハワイ根據地の如く完全に破摧し盡し得たであらうか。また無意識な米國的政治經濟思想文化の影響をば、かのシンガポール根據地の如く壞滅し盡し得たであらうか。何人と雖もいま英米を敵愾する心をもたぬはあるまい。しかし英米に由來する思想文化に泥著し、そが生み出す弊害の根源的に芟除し得ないならばどうであらうか。我々はまづ敵を知らねばならぬ。英米系思想文化の本質を十分に把握せねばならぬ。河村先生のアメリカニズム擊滅はそこに始まる。それは單なる國粹主義的反動ではなく、絶えず公正なる學者的良心と科學的精確さとをもつた根本的な批判に基づいてをり、しかも教育者としての周到な用意の下に行はれてゐるのである。先生は屢〻米英兩國民の愛國心や英國教育の優れたる事例をも指摘し、その我に攝取すべきものは躊躇なく之を稱揚してをられる。そこに先生の年來主張せられた「新英學」（明治以來の所謂「英學」に

對する）の意圖が遺憾なく現れてゐる。勿論或は英米崇拜の心理をそのまゝ利用して當時の時代思潮の主流たる獨露系共產主義に對する以毒制毒的效果を期し、或はウィルソンやH・G・ウェルズの如き淺薄な英米思想を剔抉せしむる爲に英米識者の言を以てする等、「敢て『日本』と言はず、又『古典』を語らず、專ら外國思想を使役して外國思想を打たしむる方策」に出でられた一面もある。併し、時にはまたダートマス大學教授ジ゛ージーの有色人種搾取論を指摘したり、私刑の蠻風や男女道德の積弊について米人自らに語らしめたりすることによつて盲目的米國心醉をめざまし、或は排日問題に關する米人の正論やロイスの正しき日本人觀を紹介して對米卑屈心理や祖國日本呪詛思想に猛省を促すなど、先生の教育者らしい親心は細心にして且懇切を極めてゐる。要するに先生の「新英學」の本領は、「英米民族の精神の現はれであるところの文獻を涉獵して、彼等の國民精神と言ふものを、吾々が先づ讀み破つて了ふこと」であつた。「戰はずして英米を屈服せしむる方策の第一は我國民精神を內に養ふことであるが、それが出來たならば、次には英米の精神を讀み破つてやる」、さうすれば「英米は最早我敵ではない」と先生はいつてをられる。この國民的自主的批判の精神を以てする學の確立は米英を正面の敵としつゝある今日に於て、否たゞに對米英の現在にのみ限らず國際相剋の將來に向つては愈〻强調せられねばならぬ。敵の短所は隈なく看破し、

長所はあくまで之を知悉し得てこそ今後尙ほ極まりなかるべき長期戰に最後の勝利を克ち得るのである。卽ち居ながらにして既に敵を呑み敵を超えて之を屈服せしむるの道であつて、徒らに盲目的排擊に終始するが如きは、却て自らを敵と對等の地位に墮するものである。長くも宣戰の大詔に昭示しまします如く、既に米英を超越せる立場に立つて大東亞戰爭を戰ひつつある「日本」の眞面目を愈〻顯現せしめ、彼をして遂に正しきに復さずんば已まざるの大識見を以て必勝の作戰を展開しつゝある所以のものを內に外に明らかならしめねばならぬ。永遠不斷の國防の根基が寧ろ思想戰にあることを思へば、河村先生の「新英學」は愈〻正しく相續展開せられねばならぬのである。この意味に於て本書の今日に於てもつ意義は頗る廣く且つ深いものがあるといへよう。

更に又、先生が明治以來の教育思潮及び教育の實際につき假借なき批判を加へ、且つ一般國民の教育に對する冷淡無關心に對して警鐘を亂打してをられることは、國家非常の際と雖も教育の事は一日も忽せにす可らずといふ御聖諭を仰ぎまつるにつけ、現下の實情に鑑みて益〻聲を大にして叫ばねばならぬ。殊に國防の根柢は教育にありといふ先生の言は、當今日の時弊を警むるのみならず、文武一如の我が國民精神の傳統を喝破せし千古の斷案である。

かくて、本書は大東亞戰爭豫言の書であり、米英擊滅戰の根本的戰略の書であるのみな

らず、永く我が國民教育の指標として不朽の光を放つものたるべきを確信してやまぬものである。

以上いさゝか本書に收めた二つの講演の時代的背景を述べて解題に代へたのであるが、實をいへば、河村先生の眞面目は、あの清香菊花にも似た高雅なる風貌と悠容迫らざる態度とを以て語られる先生の言葉を直接聞くのでなければ決して十全にはわからない。一度先生に接した者は澄めること秋の空のやうなそして潤ほひを湛へたあのまなざしを永久に忘れ得ないであらう。深き憂を內に藏し乍ら明るきこと玉の如きそのまなざしが或は輝き或は曇り、黑く濃い口髭に掩はれた厚い唇からは、心血の籠つた言葉が、時には輕く諧謔をまじへた響きとなり、時には愁に重い斷腸の言葉となつて洩れて來た。私共は先生のお言葉によつて己の眼の開け行く嬉しさに浸りながら時の過ぎるのを知らなかつたあの斯道塾の夜の座談を思ひ起す。かうして紙に印刷されたものは如何に優れてゐても先生のお言葉の形骸にすぎぬ。然し、先生は既に居られない。いま我々は殘された形骸――然し偉大なる形骸ではないか――によつて先生のお言葉を髣髴せしめ、その精神を感得玩味するの外はないのである。事實、先生の偉大さは、歿後十年、その遺著によつて益〻光を增しつゝある。今や國內の到る處に

先生の私淑者と共鳴者とが輩出しつゝあり、先生の卓見は大きな生きた力となつて働いてゐる。

本書は先生の十年祭を迎へる記念に我等先生の膝下に教をうけた者達が相圖つて刊行を思ひ立つたのである。斯道文庫は昨年十二月七日に意義深い十年祭を營まれたが、その翌日あの感激に充ちた十二月八日を迎へたことも、思へば偶然ではない。その後時局下でもあり、また不慣れなために刊行の時期は意外に遲れたが、愈〻上梓するに當つては感慨のひとしほ新たなるものがある。今や皇國の大飛躍の時に際會して「先生が今日居られたならば」と思ふ心は益〻切である。こゝに我等は廣く世の人と共に更めて先生の導きを仰ぎ先生の御志を展べたいと思ふ。願はくは、近く斯道文庫から逐次刊行せらるべき「河村幹雄集」（全四卷）につき、更に廣く更に深く先生の精神に參究せられむことを。

昭和十七年十月

渡邊幸生謹記

著者略歴

一、明治四十四年東京帝國大學理科大學地質學科卒業
一、九州帝國大學工學部教授、同工學部長、學術研究會議會員、理學博士、昭和六年死亡
一、河村幹雄博士遺稿名も無き民のこゝろ

國防の將來

定價 一圓五十錢 (稅)

昭和十八年四月一日 印刷
昭和十八年四月五日 發行
(五〇〇〇部)
出文協承認 あ四六〇一二一號

著者 河村幹雄
發行者 草野貞之
東京市神田區小川町三ノ八
印刷者 愛光堂印刷社(東東一八)
岩本米次郎
東京市赤坂區青山南町二ノ一六
中野製本所・中野和一製本
東京市京橋區越前堀三ノ二
發行所 株式會社 白水社
出文協會員一二六五〇七番
東京市神田區小川町三ノ八
振替口座 東京三三二二八
電話神田(25)三五九八番

日本出版配給株式會社 元給配

規格B6判